

大正レトロ豆紙人形 門司港駅に帰郷

JR門司港駅（北九州市門司区）のみどりの窓口
に、小さな紙人形が並ぶ。駅舎が大正時代の姿に戻
った今年3月から飾られている。作ったのは地元出
身で、駅舎とほぼ「同級生」の女性。その分身たち
が1世紀の時を超え、ふるさとに帰ってきた。

作者は2006年に93歳から。目が見えなくなって
で亡くなった武藤正子さ
ん。駅が建てられた前年の
1913（大正2）年に現
在の門司区で生まれた。

駅では、「豆紙人形」と
名付けた数々のほどの作品
がケースに25点収められて
展示されている。竹馬、通
りゃんせ、鞠つき、子守
……。正子さんが門司で過
した幼き日の、懐かしい情
景と昔遊びの様子を千代紙
や綿棒で形にした。素朴で
温かな味わいで、和の「門
司港レトロ」を体現してい
るようだ。

山口県下関市の女学校を
卒業後、正子さんは門司を
離れた。夫が亡くなった
後、学生時代に好きだった
絵を70歳で習い始め、78歳
でパステル画の個展を開い
た。豆紙人形づくりは88歳
から。目が見えなくなって
くる中、指の感覚を助けに
約300点をつくった。
次女で作家のヒロコ・ム
トーさん（73）＝横浜市＝
は、豆紙人形の写真に添え
て正子さんの言葉などをつ
づった本を出版。展示も国
内外で開き、豆紙人形作家
「マサコ・ムトー」の作品
と人生を伝えてきた。

門司港駅の展示は、ヒロ
コさんが「母の人形を生ま
れ故郷に返したい」と、13
年にJR九州の青柳俊彦社
長（当時は専務）らに相談
し、「改修工事が終わった
ら」と応じてもらった。
それから6年。国重要文
化財の駅舎が改修工事で建
設当時の姿に戻り、3月10
日にグランドオープンした
日、「旧貴賓室」を訪れた
ヒロコさんは、青柳社長に

駅舎と「同級生」の女性 幼き日を再現

「約束は忘れていませんで
したよ」と笑顔で迎えられ
た。「一番いい場所に飾っ
てもらって感激しました」
ヒロコさんも思いの丈を
込めた仕事に取りかかって
いた。かねて構想していた
正子さんの一代記だ。下関
市の母校などから資料を集
め、昨秋から年末にかけて
書き上げた。駅の開業に間
に合わせようと自費出版し
た。

病気で満身創痍ながら明
るく前向きに歩を進め、人
生を展開させていった姿を
描いた。「人はいくつにな
っても輝ける。そんな可能
性を教えてくれた」とヒロ
コさん。関門を訪れる旅人
が駅舎の人形に目をとめ、
母のことを知ってもらうき
っかけになれば、と願う。

「人生いつでも花開く」
（野絵瑠社、税別1500
円）と題した本は、ブック
センタークエスト小倉本店
（北九州市小倉北区）、くま
ざわ書店下関店（下関市）
で販売している。（奥村智司



①豆紙人形を手にするマサコ・ムトーさん＝2003年、神奈川県藤沢市
②豆紙人形「一人縄跳び」
③豆紙人形が展示されたJR門司港駅を訪れたヒロコ・ムトーさん＝3月9日、北九州市門司区（本人提供）